

海部宣男氏ロングインタビュー

第9回：すばる望遠鏡（後編）



高橋 慶太郎

〈熊本大学大学院先端科学研究部 〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪 2-39-1〉

e-mail: keitaro@kumamoto-u.ac.jp

インタビュー協力：小久保英一郎（国立天文台）

海部宣男氏インタビューの第9回です。すばる望遠鏡の建設についてのお話は今回が最後になります。大勢の研究者や技術者、そして企業が協力し、数多くの困難を乗り越えてすばる望遠鏡は予定通り完成しました。望遠鏡はその後大活躍することになりますが、現地の人との関わりや観測所のあり方など、継続して取り組んでいかなければならない問題もあります。今後ますます大型化する天文学の観測装置を建設・運営していく上で、海部氏の証言は大いに参考になることでしょう。

●ハワイ観測所

高橋：ハワイ観測所ができたのは1997年ですね。日本にいるときからハワイにはしょっちゅう行ってたんですか？

海部：それはもうしょっちゅう行ってました。ちょっと数えきれないけれど、だんだん増えてくんですよ。最初のうちはどっちかっていうと、ハワイよりも、例えばカナダのコースト・スティールというドームを作っている会社。それからアメリカのコーニングはガラス会社でパロマーの5mも作っている。そこからピッツバーグにあるコントラベスという光学会社に運んで、そこに石灰岩の切り出しの後のでかい洞窟があってね。その中に研磨工場を作って研磨機を置いて、研磨をする。研磨は4年もかかるわけです。僕はむしろ、そういうところへ行きました。後は三菱電機とか富士通とかの打ち合わせですね。メーカーとの打ち合わせは非常に多い。で、現地で工事が始まると、その視察には時々行かなきゃいけないけど、そうしょっちゅう行ってるわけにいかないでしょ？ 現地はね、そのときは成相（恭二）さん

が、現地オフィスの所長で行ってるわけです。

高橋：一応、オフィスはあったわけですね。

海部：小さいけれどもね。最初はホテルに間借りして、そのうちもうちょっとちゃんとしたオフィス借りてっていう風に、だんだんだんだんね。で、現地には基本的に日本から3人、成相さんと、技術の宮下（暁彦）君と中桐（正夫）君。それで現地で秘書の人を雇ってという風にして。だから数人体制のオフィスを作っていったわけですね。そこが現地工事を代わる代わる見たり、報告したり、それから大気の測定とかですね、そういうこともやってたわけです。30mのタワーを建てて大気の乱れを観測するとか、そういうことは実は予算がつく前からやってた。何かあると行く。

それからハワイではマウナケアの観測所長会議というのがありまして、マウナケアに観測所を持ってる連中が年に1回集まってるいろんなことを相談する会がある。そういうのがあったら行かなきゃならないね。後はハワイ州の知事とか市長に会うとかさ。それから IfA, IfA っていうのはハワイ大学の天文研究所ですね、Institute for Astron-

omy, これがマウナケアのいわば大家さんみたいなもんでそこへ行ったり. IfAとは赤外の観測装置1個作ってもらうという契約を結びました.

高橋: ハワイ観測所ができたのは1997年ですけど, それはどういうタイミングでできたんですか?

海部: これはね, やはり現地で望遠鏡を組み立てるということが始まるわけね. つまり最初は基礎を作って, ドームを作って, その後, 日本で借り組みまでできてた望遠鏡を解体してハワイに運んで, ドームの中で組むでしょ. その段階というのは, もう現地の仮オフィスでは無理なんですよ. ものがどんどん運び込まれるでしょ. そうするとこれは輸入になるから事務的にも書類がものすごくあるしさ. そういう事務量から考えても, 望遠鏡の組み立てを始める段階ではちゃんとしたオフィスが必要であると, そういうことで97年ということになったわけですね.

高橋: ハワイ観測所ができて, 組み立てが現地でも本格的に始まったということですね.

海部: そうです. 97年から組み立ての方が本格化した. それで1998年に山頂で望遠鏡の組み立てがほぼ終わって, コントラベスでは鏡の研磨が終わって, それで輸送すると. ピッツバーグのコントラベスからオハイオ川に船を浮かべて, そこから五大湖を通って, それでミシシッピ川へ抜けて, ミシシッピ川からニューオーリンズまでダーッと下るわけね. そこから海洋用の船に積み替えましてね, パナマ運河を通って, 太平洋を越えてハワイ島まで来ると.

小久保: すごい.

海部: それからハワイ島で山を登れるように専用の車に積み替える. これはもうドイツが作った特別な車なんだよ. ジャッキがバーッといっぱい付いててね, 斜めのところでも荷台はかなり水平になる. すごい車だな. それに乗せて運ぶという. それは道路を封鎖しなきゃなんないので警察にも頼んで警備してもらって. それだけじゃなくて途

中の橋も強化するとか, 道路標識を一時引っこ抜くとかそういうことをやる. それは日本通運がやった. 日本通運はああいう腕は大したもん.

高橋: 運ぶのも一苦労ですね.

海部: それでミラーを入れるのも大仕事だったんです. 洗ってコーティングをするという大事業があったわけですよ. コーティングというのは, 8.2 mのミラーを巨大な真空釜に入れて, アルミニウムを真空蒸着するわけね. これはこれで重要な技術で, どういう風にやれば一定の, しかも望んだ通りの厚さになるかとかです. それからどう洗えばいいかとか. 実は最初はちょっと失敗してて, きれいに洗って洗浄したつもりだったのに, コーティングしてみたら誰かの足跡がちょっと付いてたりね.

高橋: へー (笑).

海部: その種のことはあった. だけどまあそれは実質的には, 大した違いはないからね. とにかくあらゆることが初めてだったですよ. それで組み込んで, いろいろ調整をしたり, ポインティングをチェックしたりして.

●すばる完成

海部: で, 1998年の12月にエンジニアリングファーストライトをやった. このファーストライトはね, マスコミからの要望がものすごく強くて, あらかじめマスコミを呼んだんですよ. 呼んだ以上は, ちゃんとやんなきゃいけない. とにかく光が入るところを見せなきゃいけないんだ. なかなか大変だったんだ. そうするとまあ, 工程的にやっぱりそれが大変きつくなりますから, やっぱりちょっといろいろ無理はあったとは思うな.

高橋: ファーストライトはうまくいったんですか?

海部: まあうまくいったとも言えるし, うまくいってないとも言えるんだよ. まあ基本的には星の光は入ったということです. でもきれいなイメージまではなかなかいかない. とにかくほんと

に初めて入れたんだから。

小久保: 予行演習なしにやったんですか? ぶっつけ本番で?

海部: ぶっつけ本番。

高橋: マスコミの前でやるんですか?

海部: ちょっと像は結構ぼけてたど僕は思いますが、光はちゃんと入りました。

高橋: そのときはだいぶ報道されて?

海部: うん、そうね、そういうのは大事は大事で、こちらから言わなくてもマスコミはどうしたってそういう報道したいわけなんで、ある種のサービスでもあるわけですね。

小久保: それはもう一般の方だって、楽しみにしてるというか、うれしいニュースですよ。

海部: いや、そうなんです。それでエンジニアリングファーストライトと言ってるのは、要するに光を入れるという、ただただそのためです。その後調整して、イメージをどんどん出して、だから1999年9月の完成式典(写真1)にはもう立派なオリオンとかのイメージがたくさんあったはずですよ。

小久保: そうですね、ですから論文も2000年でしたよね。

海部: そうですね、2000年に論文が出てますね[1]。

小久保: そういう中で紀宮さんにいらっしゃってもらったりとか。

海部: 紀宮さんがいらっしゃったのは完成式典ですよ。

小久保: 僕が聞いたのは、そのときに紀宮さんを迎えるための雨よけっていうか、車が入る、ああいうものを観測所を作っておかないといけないみたいな話を聞いて、ええ、すごいなって。皇室を迎えるのにそれができたという話を聞いて。

海部: それは、なんか作り話だぜ。

小久保: そうなんですか? やっぱり皇室は違うよとかなんか言ってたんですけど。

海部: あれは最初からあった。紀宮さんがいらしてやったのは植樹ぐらいなもんだらう。

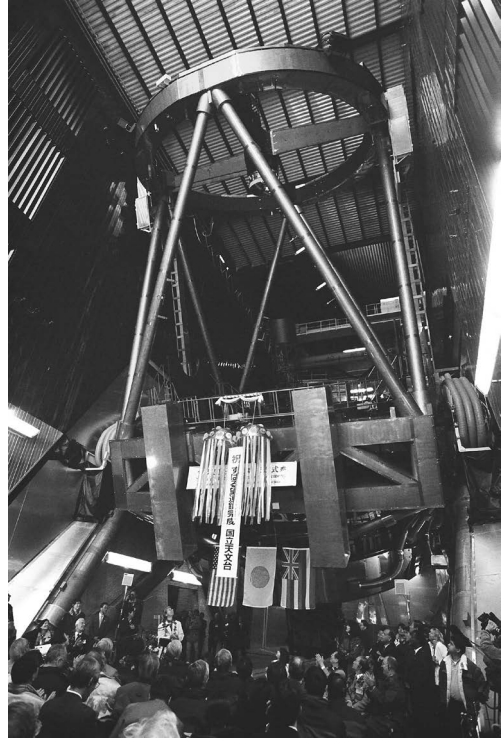


写真1 すばる完成式典(国立天文台提供)。

小久保: ああ、でもあの巨大アイピースを付けて、すばるで眼視するためのアイピースが実はあるんですよ。

高橋: すばるで眼視! そんなのがあるんですか?

小久保: あるんだ。

海部: ああそれはね、ちょうどそのときまだナミスミス台が空いてたの。で、それ用に3,000倍のアイピースを付けた(写真2)。

小久保: すごいですね。

海部: これはね、後にも先にもそのときしか使っていない。

高橋: 見てみたいです。

海部: 僕も初めてあんなの見ただけね。惑星状星雲なんかほとんどにきれいな緑色に見えるんだ。

小久保: はあ、そうですか。

海部: うん、さすがですよ。そのとき、観測所員の家族も後で全員見て。

小久保: 見たんですか?

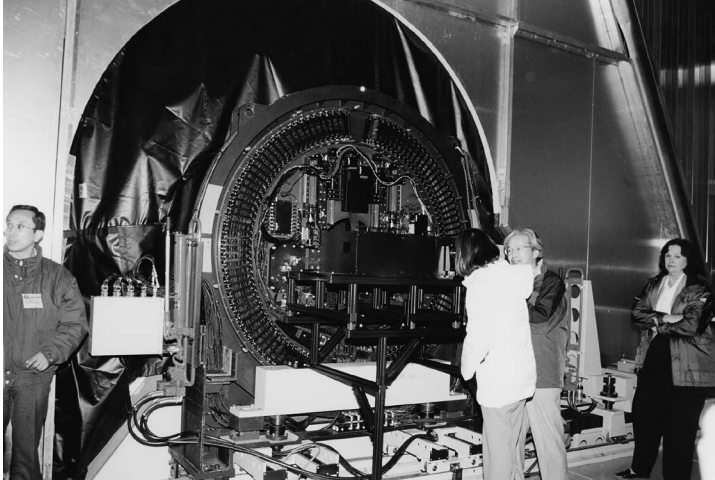


写真2 すばるのアイピースを覗く紀宮さまと付き添いの海部氏（国立天文台提供）。

海部: うん、見た。その翌日、職員・家族にオープンにしてみんなで見たの。だってもう見れなくなっちゃうんだからね。

小久保: あっそうか、もうナスミスに装置が置かれちゃってアイピースを付けられなくなっちゃったんですね。

海部: うん、装置がどばーんと入るんで、もう見れないんです。

小久保: そうですね。

海部: すばるの正式の完成は2000年の3月なんですね。予算はもうそこまで、つまり99年度分までしかなかったんだな。

高橋: 事故が起こったり鏡を磨くので当初予定より時間がかかったりということですけど、完成はその分延びたんですか？

海部: 完成は延びてないです。

高橋: ああ、そうなんですか。それは全く影響しなかったんですか？

海部: 影響はしてるよ。ある意味、いろんなところに負担もかかるしね。鏡がついてから洗って、コーティングかけるまで、その時期はなかなかきつかったと僕は思います。

高橋: 予算が2000年3月で切れるってことだっ

たんですよ。それはもう最初から決まってたわけですか？

海部: それは決まってることだし、そのことはそんなに全体に影響は及ぼさない。

高橋: もし完成が延びてしまったら、どうなったんですか？

海部: それはね、面倒くさいけども絶対困るということではなくて、その種のことは日本でも結構ある。アメリカなんか、そんなもの平気で2年や3年延びちゃうわけね。だけど日本の場合、基本的にはだいたい予定通りにやるっていうのが今まで

の伝統でね。予定通りできればそれが一番いいわけですが、仮に延びた場合でも予算の繰越というのが全く認められないわけじゃないです。書類が面倒だし、交渉しなきゃいけないけど。

高橋: 一応、融通は効くと。

海部: ええ。だけどね、すばるは僕はそれほどの心配はしなかった。とにかく98年、99年にすでに結構なイメージを出してたわけでしょ。共同利用に持ち込めるところまですぐ行くかっていうと、それはすぐではなかったですけどね。野辺山45mのときは1982年度に予定通り完成して、その年の春から共同利用を始めてたからね、まあ無理やりやったっていうのもあるけど。それに比べれば、すばるの方は少しゆとりを持って共同利用を始めたんで、その点でもそんなに大変じゃなかったと思うんですけど。

高橋: ではとにかくすばるはちゃんと完成して、そういう達成感みたいなものは？

海部: それはありますね。それは大いにある。だから、僕は今でもすばるへ行くの好きだし、向こうの人も歓迎してくれるし。すばるはよくできたと思います。ただ、悔いというのが全くなくはなくて、やっぱり観測所としてのありようというか

ね、体制を作るのが難しかったですね。英語の問題と、それから事務の問題と、この2つは非常に大きくて。

最初、僕は観測所は英語の世界にしようと思ったわけだね。だけど日本から行った技術系の人がやっぱりそれだとやってけないんですよ。それからメーカーの人もそうなんだね。結局、日本語でやらざるを得ないでしょ。今はもう向こうに長い人の方が多いからね、だいぶ英語になってきているけれども、それが1つ。

もう1つは事務。やっぱり事務にはずっと困ってましたね。いい人も来てくれて助かった面もあるけれど、やっぱり人事権をよそに握られてるっていうのはね、観測所や研究所としては非常に辛いことですよ。まあ法人化したんだから、今は新しいやり方をするというのもだんだんできますけども、それをやると文科省との人事の流れが完全に切れるんですね。その辺は覚悟がいること。それはできるんだよ、できるしやればいいと僕は思うけども、そんなような覚悟をしながらやってかなきゃいけない。法人化前は、全くそれはできなかったわけです。手も足も出ない。

高橋: すばるの方では、自分で何か観測っていうのはされたんですか？

海部: 僕はその前のUKIRTを使った観測はやったけれども、やっぱりすばる望遠鏡ができれば日本に帰っちゃったわけだから、その後はディスクの観測とか、いくつかまあ僕の名前の載ってる論文はありますけど、僕が中心になって自分で論文書いたのはすばるのファーストライトの論文までだと思いますね。むしろ野辺山の方が、そういう意味じゃ続いたのかもしれない。

小久保: CIAOの研究グループにお名前はある。

海部: そうです。CIAOのグループとはその後観測に行ったりしてはしますがね。まあもう、若い人の時代だよな。

●バックヤード・テレスコープとジャンプ

高橋: 海部さんは電波から光赤外に移って、たぶん技術的なところはだいぶ違うと思うのですが、共通する部分もあるんですか？

海部: まあ望遠鏡だから、基本的に同じだと思いますね。僕はね、すばるへ行って一番最初にほうっと思ったのは何かというとガラス。ガラスという材料に初めて出会ったというか、大きなガラスというものの光学的な性質ってのを初めて勉強した。それまではスチールだからさ。スチールというのは弾性に富むわけですよ。ガラスというのはそうじゃなくて、ちょっとヒビが入るとそれが広がっちゃうという恐ろしいものである。は一っと思っ。だから鏡はちょっとでも傷が入ったりヒビが入ると、そこを削っちゃうんですね。削って磨いちゃう。そうしないとヒビが広がるからね。ヒビって恐ろしい。地震もそうですけど、ああいうものというのは破壊だからね。ちょっとしたヒビがばあ一っといつ広がるかわからない。それが一番最初の面白かったことだよな。TMTは違うよ、だってガラスがそんなにでかくないからさ。むしろでかいストラクチャーという意味では45 mと似てるんです。

高橋: そうなんですか。一方で、技術的な面というよりは、プロジェクトを推進するとかっていう部分では、野辺山を作りあげたのがかなり活かされたのかなと思うのですが。

海部: それはそうですね。メーカーとの付き合いもだいたいみんなおなじみ、野辺山でおなじみのメーカーですよ。キャノンやオハラは別だけれど、三菱、富士通ね、みんな知った仲間ですから。それはすごくやりやすかったよね。

高橋: そういうのって勉強してどうにかなるようなものじゃないと思うので、野辺山45 mを経験されたからこそすばるに呼ばれたっていうことでしょうか。

海部: そうですね、やっぱり大きなものを作るとかいうのは、ある程度、経験が必要だと僕は思うな。そんなこと言ったら初めてやるときはどうすんだって、野辺山のときはどうしたのかって言われるかもしれないが、まあ野辺山のときだって6mを作った経験ってのは生きてるよね。だから全く徒手空拳で、いきなり45mを作れて言われたら、僕らはたぶん立ち往生したと思うんですけどね。その前にとにかくちっちゃいもんでも、全部自分たちの手で作ってるからそれはだいぶ違いますね。

小久保: そういう海部さんみたいな経験は、ほんとに海部さんと近い世代だけしかできていなくて、今の日本では難しいんじゃないですか？

海部: まあそうですね。

高橋: アメリカでは昔から作る人と観測する人が分かれてたということですが、今は日本でもそうなりつつありますね。

小久保: それが完成されている姿なんですかね。僕がいいなどと思うのは、海部さんの時代のように自分でモノを作って、それを使って天文学をやれるというのが、一番面白そうというか、楽しそう。苦労は多いかもしれないけれども。

海部: そうですね。それにそういう経験があると次のステップということの発想も、よりいろいろと出てきますよね。今、言われたこと大事でね、岡山をなくすという話が僕がハワイに行っている間にあったんだよね。僕はそれは絶対ダメだと。国内に大学院生が触れる望遠鏡が必要であると。だから岡山はなくしちゃいけないということなんですけど、そうはいつでも188cmをいつまでも使えないので、結局京都と一緒にやっていくという風に切り替えていこうという話が進んでるわけです(2017年4月当時)。僕はバックヤード・テレスコープというのだけど、6mはそういう意味で実によかった。

高橋: 自分たちで触れる望遠鏡ということですね。

海部: はい。だっぴいきなりトップのものに飛びついても、それはなかなかうまくいかないでしょ。45mは僕らとしてはものすごく大きなジャンプでしたけども、そのジャンプは実際に可能なジャンプだったわけだよ。それはすばるもそうだと思っている。すばるを作るについては三菱電機が存在が大きくて、彼らはその前に望遠鏡を実際に作ったんです。ここ(三鷹)にあった1.5mの、広島に行ったやつね、あれを作ったのは彼らの練習なんだね。技術的にも、ちょっと試しをやってみたりしてさ。まあ、そういう意味で三菱の存在は大きかったです。

けども、何ていうのかな、やっぱりジャンプしないだめなんだよ。前に言ったように、すばるを作るときは国内3.5m派と海外5m派とで大論争をやって、結局3.5m派が勝った。それで光天連が学術会議天文研連に出して、大先生方から一喝されたわけだよ。

高橋: そうでしたね。

海部: それぐらい難しいんですよ、ジャンプするというのは。みんなで議論すればいいかということね、必ずしもそうじゃないのだよ。これは別に光天連(光学赤外線天文連絡会)だけじゃないと思うよ。みんなで議論すればホントにいい結論が出るかどうかは必ずしも自明じゃない。どっちかという保守的になってしまう可能性の方が実は高いんですね。そこを強いリーダーシップでエイヤツといくか、まあその辺が難しいですよ。

僕は今の宇電懇(宇宙電波懇談会)ではそういう精神はちょっともう衰えていると思いますよ、やっぱり。宇電懇で議論するとやっぱり保守的な議論ばかりあるような気がするし、かつての光天連は全然笑えないんじゃないかな。それで僕は、ちょっと違うシンポジウムをやらうと言ったんです。この前(2017年3月11-12日)、本郷でやった将来計画のシンポジウムね(学術会議シンポジウム「天文学・宇宙物理学のさらなる地平を探る」)。あれはもう各分野の懇談会から出てくる

計画を議論するのは止めよう。それより、むしろ30年後に何をすべきか、若い人は何をしたいかという、そういうところから出直したらいいんじゃないかって言って、宇電懇も解散したらどうだって言ってね。それぐらいやらないと、組織は必ず保守化するんですよ。今まで天文はね、各分野組織があったので非常に上手に回してこれたわけね。つまり宇電懇を作って野辺山をとにかくやったでしょ。あれがまあ分野の組織の最初ですけども、それから光天連とか理論懇ができて、それぞれの分野で議論しているんな計画を出してくる。そういう風にして回してきたわけですけども、僕はもうその段階は過ぎつつあると思います。それをやっていると各分野分野の保守的な提案しか出てこない。分野を超えないともう次の世代の新しい天文学はできないし、まず自分たちで次の装置考えましようというのはもうダメとっているんです。

●現地の人との関わり

小久保: すばるのときは、今のTMTのような現地の方との話し合いというのはスムーズにいったんですか？

海部: 多少、問題がありました。それはいつ起きたかと言うと、すばるの建設の後なんだね。それまでも山頂にいろんな大きな望遠鏡がどんどんできるということで、多少くすぶってはいたんですよ。きっかけを作ったのはね、ある意味で言うと僕はすばるだと思う。さっき言ったようにコントラベスからミラーを運び込むのは大変だったんですね。

高橋: すごい車も用意して。

海部: ところがですよ、それに目を付けた人がいてね。つまり世界最大のミラーがハワイ島に来るとかいうので大規模に報道されたわけね。そしたらシエラクラブの支部がホノルルにあって、シエラクラブってご存知？ シエラマウンテンズっていうのがカリフォルニアにあるでしょ。石灰岩の

すごい山脈ですよ。そこで発祥した自然保護運動。世界最初の自然保護運動は、実はそこが拠点で始まったシエラクラブっていうんですよ。ヨセミテを国立公園にして保護するという運動がアメリカではずっとあって、それが実現するわけね。そういうの中で生まれたのがシエラクラブ。自然保護運動の走りですね。

その支部がハワイにあったんだけど、何もしてなかったわけだ。だけどその報道を見て、はたと、これは仕事になると思った人がいたんですね。これは環境破壊である。そしてそれにネイティブ・ハワイアンの一部の人たちが乗って、つまりハワイの人たちはもともと反感を持ってた。自分たちの聖なる山にあんな望遠鏡をどんどん作られて。でもなかなか声上げられなかったんです。そこで、声を上げた。

高橋: マウナケアはネイティブの人には聖なる山ということなんですよ。

海部: それでね、ミラーを上げるときは別に何の表立ったこともなかったけど、とにかくそれがきっかけになって運動が始まりましたね。それで例えば、Keck望遠鏡の駐車場に釘が撒かれるとかですね、特に反対運動が起きたのはKeckなんだよね。あれは10mが2つあるんだけど、さらにアウトリガーって言って小さい望遠鏡を周りに10個ぐらい作って干渉計にしようとした。つまりヨーロッパのVLTの向こうをはろうとしたわけですよ。それに対してね、おかしいじゃないかと。つまりそもそもKeckは望遠鏡は1個だと言いながら黙って2個作った。その上あそこには協定があってですね、山頂全部で望遠鏡の数は13個に制限するという、一応そういう約束があるんですよ。それをKeckは2つでも1つだといひ張り、さらにアウトリガーを作るって言ったものだから、それで特にネイティブの人たちが強く反対を始めた。それから山頂が汚れてるとか、いろんな声がワーワー上がるようになったんですね。だから、Keckに対してはデモもあった。でもすばる

るはね、ターゲットにはなってないんですよ。

小久保: そうなんですか。

海部: うん、それは1つにはね、ハワイには日系人の人たちが結構いて、地元で溶け込んでいるというのがあって、僕らはわりと早くからそのことに気がついて、コンタクトしてたんです。だからすばる望遠鏡の完成式に反対のデモとかあるんじゃないかって心配はあったんですが、小川さんっていうハワイ総領事と相談して、むしろいっそ彼らを招待しよう。これはもうマウナケア始まって以来でね、彼らはとても喜んだんですよ。大挙してきた。それでお祝いの歌を歌ってくれてね、感激だったな。彼らと僕はその後もずっと付き合いがあって、僕が日本に帰るときのパーティーにも来てね、やっぱり歌を歌ってくれたりしたんです。でも僕の後、ちょっとそういうのは途絶えたな。だから一定の反対運動はありましたが、すばるに関していうと大事なく終わってるし、結構な友好関係もある程度作ったんです。

今のTMTの場合はまた少し様子が変わっているんです。運動がもっと組織的になってるし、やっぱり30mってでかいもんね。それからハワイの独立派っていうのが、それなりに勢いがまだあってですね。ご存知と思うが、ハワイはもともとアメリカに武力クーデターで王朝を倒された国だからね。それはいまだにみんな怒っているわけですよ。さすがに独立っていうことまで言う人は少ないけど、独立派はいるわけね。そういう人たちは正面切っているんなことやるし。いろんなことがあって、今のTMTはもうちょっと複雑なってます。

●不協和音を乗り越えて

海部: まあそういうわけでいろんなことがあって、すばるの人たちと一緒にやってきたけども、ちょっと残念だったなあという気分が正直言うところにはある。これはまあ僕の過失でもある。

高橋: どういうことですか？

海部: ハワイでの建設のときに生じた一連の騒ぎはご存知でしょうけれども。

小久保: ええ、僕はちょっと知ってますけど。たぶんですね、高橋君は全く知らない話ですよ。僕が2000年に国立天文台に着任したときにちょうど海部さんが台長としてハワイから戻って来られて、そのときにいろんな人からちょっと聞いたんですよ。

海部: だから小久保君も現場を見てるわけじゃないんだね。結局そのときは何が起きたかという、ハワイ観測所の次期所長の選挙っていうのをプロジェクトメンバー全員でやるという、そういうやり方だったんだね。で、開けてみたらわずかな差ですけど僕は負けたんですよ。それでみんなびっくりした。

高橋: 選挙はいつだったんですか？

海部: 97年から所長をやって、99年の4月で交代が見込まれてたけど、98年の秋ぐらいにそういう所長の選挙をやったと、そういうことですね。でも99年4月から建設終了までまだ1年ある。それでね、天文台中、大騒ぎになったんですよ。それでどうするってんで、結局小平(桂一)さんの最終的な裁定で僕はもう1年所長をやると。

高橋: もう1年。

海部: うん、つまり完成までは僕が所長をやると。こういうことに決まったんですよ。

小久保: ああ、それじゃ選挙結果とは違うことを小平さんの裁量で決めたっていうことですね。

海部: そうですね、だから1年ずらしたと。まあそれは言ってみれば、完成1年前に所長が帰るなんていうのは、ちょっと世界から見たらびっくりされることでしょ。

小久保: そうですね。

海部: それは林(正彦)君がさかんに言った。「そんなの説明できない」って。それでそんな騒ぎがあったのがちょっと僕にとっては大変残念なことでした。そんなことしなくたって建設を終え

たら僕は帰るつもりでいたんだから。

高橋: どうしてそういうことになったんですか？

海部: 基本的に言うと、旧岡山や光赤外のグループが電波からすばるを奪い返すという、どうもそういう旗印でやったんだね。つまり、僕が野辺山から来たことがそもそも気に入らなかった。なんで俺たちの仕事に電波が入ってくるんだという雰囲気であったらしい。僕はそんな雰囲気があるなんて知らないですよ。僕は小平さんから声を掛けられて、呼ばれたと思って来たわけだから。でもすばるに来てみたら小平さんが僕を誘ったってことは、すばるの光赤外の人たちは全然知らなかった。その辺に実はもうすでに種があったんだね。そんなこと知らないで僕はみんなで一丸となって望遠鏡を作ると行って行ったし、それをずっと信じてたわけですよ。大望遠鏡を作るプロジェクトでね、そんな個人的な感情が入るとは僕は思いもしなくて。

こういうことっていうのは、大型の計画では起りがちなことでね、大変不幸なことです。だから前にも言ったように、すばるの場合はももとの光赤外内部の論争まで引きずってきちゃったから、そういうものがちょっと払拭できないまま、残念ながら残ったと思うんです。

高橋: もともと国内派と海外派がいてっていう構図がまだ残っていたと？

海部: まあそのときのしこりは解消したことになるんです。要するに学術会議で決まったっていうんで大変な騒ぎで、まあこれは認めざるを得ないということになって光天連も最後はそれを受け入れたんだから。ですから全体として大転換をして小平さんをリーダーにっていうのは、まあそれはそれで結果としては一本化したわけですけども、そのときの意見の対立そのものではないけれど、やっぱり不協和音的なものが常にあったわけね。それがまあ僕の事件の場合だったらやっぱり岡山対電波っていう対立にもなって現れたわけですよ、おそらく。それが起きたのは1998年

の暮れだから、ファーストライトをやるようとしてる最中に起きたんですね。それまで僕は知らなかったの。

高橋: その選挙の前までは何もいざごはなかったわけですか？

海部: 僕のところには届いてこない。だから日本でやってたんでしょね。僕がハワイで何やってる、かにやってるっていうのを日本に帰ってきちゃ言いつけたり、運営協議会なんかでも海部の悪口っていうのがもうさんざん出てたって言うんですよ。僕はそれを後から聞いた。当時は僕はそんなことも何も知らない。僕のところには何も言っていないんだよ。陰で、「海部は日本にたくさん帰りすぎる」とか言ってたらしいんだよ。日本に帰るのは当たり前で、日本でだって打ち合わせがあるわけですよ。そんなことを1つ1つ全部あげつらって、そうするとまあ忙しいとかスケジュールが急すぎるとかいうのも、全部不満にすることはできるでしょ。そういうのをとにかく全部集めて。そういうことは僕は後でわかったんですけど、ほんとにびっくりしたよな。でも僕はプロジェクトリーダーとして、やっぱりそういう表立った批判が出るというのはよっぽどのことだから、これは全て僕の責任と思った。だから僕は公の場では「すみませんでした」としか言ってないですよ。何にも釈明してないし、まあよくわかんなかったからな。だってファーストライトの裏で海部降ろしの運動があったんだもんなあ。

高橋: ファーストライトがきっかけになったんですか？

海部: その前からですね。ファーストライトのときにはもうわかってた。だから僕はそのときはもう非常に消耗してたんです。そういうことがあった中でファーストライトをとにかくやんなきゃいけないから。それはもうおくびにも出せないことだし。後でわかったけど、どうもその選挙の準備を前からずっと進めてたらしい。僕はびっくり仰天だよ。前線で戦って後ろから撃たれたって

う、全くそういう印象だったし、そう思った人は他にも大勢いるんですね。そういうことを一切知らされなかった人たちもいた。99年の所長の改選期で、つまりそこでもし僕がまた所長になると、ずっと居座るんじゃないかという風に思ったらしい。

小久保: 居座る？

海部: うん、「海部王国を作られちゃう」って言った人がいたから。僕は何のために来たかっていうと、望遠鏡を作るために来たんだから、望遠鏡を作ったら帰る。日本に帰るつもりでいたわけですよ、当然。

高橋: 所長には任期があったんですね？

海部: 任期は2年。つまり99年度に所長になると、99年度から2000年度でしょ？ で、2000年の3月で完成ですからね。そうすると完成した後も所長なんですよ。それはやっぱりまずいと思ったんですよ。

小久保: ハワイの所長を1年延長してっというのには、そのときに台長が変わるっていうことまで小平さんが考えてのことですかね？

海部: いや、小平さんがそこまで考えていたとは僕は思わないです。正直言うどね、ここまで話したから言うど、僕はもう帰ったら天文台を辞めようかと思ってたんですよ。嫌になっちゃって。こんなことやられるような天文台にいてもしょうがないなあっていう気がしてて、どっか拾ってくれるだろうと思ってね。実は、個人的にはわりとそういうつもりで帰ったんですけども、帰ったら観山（正見）さんはじめ、いろんな人が台長にならんかって言うからさ。それでもしみなさんが言うなら台長をやってもいいと、僕は思った。小平さんとも僕はある時期、多少話をしました。小平さん、最終的には自分は次の台長には出ないと言ったというのが事実です。それで前と同じようなプロセスを経て、教授会で僕が推薦されて、それで評議会で決まったという、そういうプロセスだったですね。あんまり平坦じゃないんだよ。

小久保: そうですね。

海部: 妙なことだな。

小久保: まあでも当時の伝統として、電波の人たちと光赤外の人たちの対立っていうんじゃないですけど、これまでのお話を聞いていると、電波の人たちは自分たちは新しいことをやってきたという自負があって、電波とか光赤外とか分野をあまり気にしないで何でも一緒にやるという雰囲気がある中で、当時の光赤外の人たちは結構保守的というか。例えば電波からやってきた人たちとか、そういう人たちが口を出してくると面白くないと思うような、何かそういう雰囲気があったんですかね。

海部: まあ、それはあるでしょうしね、それはある程度、無理もないところもあるとは僕は思うのよ。電波との対立という風に必ずしも捉える必要はないと思うんだけど、やっぱりよそ者なんだよ。で、よそ者が来ていきなりトップに座られりゃ、面白くないわけですね。それは人による。ただ、保守性みたいなことはあるよ。電波と光の違いでいうと、電波の連中ってのは結構いろんなところへ出てってる。例えば大学なんかでも外へずいぶんたくさん出てるでしょ？ 電波から出てったのっていったら、例えば鹿児島へ行った半田（利弘）君か、それから筑波へ行った中井（直正）、山口へ行った藤沢（健太）、茨城へ行った坪井（昌人）君とかですね、他にもいるはずで、結構いる。でも光から外の大学へ出た人って非常に少なく、若い人ではいるけどね、やっぱり非常に少ない。それから光から電波に来たっていうのは1人もいない。電波から光へ行ったのは、結構大勢いるじゃない。

小久保: そうですよ。

海部: 林君、（林）左絵子さんとかさ。あと小笠原君とか理論の人めわりと変わることについてはそんなに大きな抵抗がないわけですが、光赤外はまあやっぱり変化を望まないところは確かにあるでしょうね。それが最近ではどうなのか、若い人

はね、少なくとも僕らの世代までは相当あったということは、これは間違いないですね。

高橋: それはやっぱり森本（雅樹）さんとか海部さんの、何ていうんですかね、チームの雰囲気とかいうか。

海部: それはあったとは思いますが、あったと思うけれど、やっぱり新しさってあるよ。分野として新しいでしょ。だから伝統とかいうのは背負ってない。実を言うとね、アメリカなんかでも電波天文の方がラフでライブラリーですよ。それで光の人はネクタイ締めてっていう感じがやっぱりあるよ。それはやっぱり背負ってる文化の長さとかね、そういう違いが自然に表れるんだと思うけど。電波はとにかく、ときの大沢（清輝）台長に「電波のインディアン部落」って言われたんだから、それはよっぽど当時の天文台からは異質な存在だったですよ。

小久保: いやでも、海部さんがそんな、天文台を辞めようとかまで思われてたっていうのはちょっと驚きですけどね。

海部: 正直言って、嫌になったのかな。まあ人間の本心は1つじゃないんだって言って僕と森本さんはよく一緒に言い言いたもんですよ。人間の心は100くらいあるんだぞって言って。だからそういう中で起きることですから、まあいろいろな野心もありましょうし、恨みつらみもありましょうし。

高橋: そういうのって、別に日本に限らないですか？

海部: 限らないです。どこでもありうる。まあ日本で起きるのは、日本の独特のやり方にもよるね。プロジェクトの長をプロジェクト員が選ぶというやり方は、やっぱりあんまりよくないですよ。今はもうほとんどそれをやらなくなったけど、あの頃はまあ天文台を民主化していくプロセスの中で、プロジェクト長もみんな投票するという風な習慣だったからね。そうするとそういうことは起きうるわけです。僕はずっとハワイにい

るし、三鷹じゃあ僕の全く知らない話がドーっと広げられてるなんて夢にも思わないからね。だから、僕に対して投げられた非難は、僕自身は一切聞いたことのない非難で。まあ結果としてはね、非常に大変ギクシャクしたわけです。それで結局は僕は辞めることがなくて、ファーストライトをやって、それで完成祝賀会をやったところで任期が終わるわけです。すばる望遠鏡の完成だから。もともと僕はそこで所長は辞めると思ってたしね。

高橋: プロジェクト長を投票で決めるというのはもうやっていないんですか？

海部: つまりあの事件が1つのきっかけになって、プロジェクトのメンバーがプロジェクト長を選ぶということは止めたんだ。やっぱりよくない。それは法人化も1つのきっかけですが、選考委員会を作ってそこで決めるということに変えましたね。で、林君はそれでなったんだ。それになった最初のすばるの所長が林君ですね。

高橋: ではそういう不協和音を乗り越えてすばるは完成したと。

海部: まあだから最後はちょっとその苦労が若干あったけど、全体としては非常によかったと思ってるんですよ。それはそれで問題ない。ただまあやっぱりそういう無理はどっかにあったんですね。つまり、前に言ったでしょ。田中（春夫）さんを野辺山の所長に呼んだときにも、森本さんですら不満だったってことを僕は知っていながら、自分がその立場になったときに、自分がそうなるという風には思わなかったっていうのはね、これはやっぱりバカだよな。

小久保: まあでも普通は思わないですよ。小平さんが来てくれて言ったんだから。

海部: まあだけどねえ、最後の最後には僕に「海部さんがいなきゃ、本当にできませんでした」って言ってくれた人もいたからね。僕はそれでいいと思ってるんですよ、うん。すばる望遠鏡を作る上で難局はたくさんあったからね、本当にたくさ

んあった。僕は面白かったし、おかげで僕の世界はものすごく広がったわけです。電波だけじゃなくて光の連中とやって、あれは本当に僕にとってはすごいプラスになった。

(第10回に続く)

謝辞: 本活動は天文学振興財団からの助成を受けています。

参考文献

- [1] Kaifu, N., et al., 2000, PASJ, 52, 1

訂正: 第7回インタビュー記事647ページの「鳥居(泰男)さん」は「鳥居(近吉)さん」、652ページの「中川(賢一)さん」は「中川(直哉)さん」の間違いでした。関係者の方々に深くお詫びし、訂正いたします。

A Long Interview with Prof. Norio Kaifu [9]

Keitaro TAKAHASHI

*Faculty of Advanced Science and Technology,
Kumamoto University, 2-39-1 Kurokami, Chuoku
Kumamoto, Kumamoto 860-8555, Japan*

Abstract: This is the ninth article of the series of a long interview with Prof. Norio Kaifu. This is the last part about the construction of the Subaru Telescope. With the cooperation of many researchers, engineers, and companies, the Subaru Telescope was completed as planned after overcoming many difficulties. While the telescope has achieved a great success, there are also issues that must be continuously addressed, such as relationships with local people and the management of the observatory. Prof. Kaifu's testimony will be very helpful in constructing and operating astronomical instruments that are becoming even larger.